

## 19. 人文科学研究所

|     |                 |       |
|-----|-----------------|-------|
| I   | 人文科学研究所         | 19- 2 |
| II  | 分析項目ごとの水準の判断    | 19- 3 |
|     | 分析項目 I 研究活動の状況  | 19- 3 |
|     | 分析項目 II 研究成果の状況 | 19- 3 |
| III | 質の向上度の判断        | 19- 5 |

## I 人文科学研究所の研究目的と特徴

### 1 設置目的

本研究所は、1949年に京都大学人文科学研究所（旧人文）と東方文化研究所および西洋文化研究所が合体して新たに発足した研究機関であり、母体となった研究所の業績を継承しつつ、世界文化に関する人文科学の総合的研究を行うことを、その目的としている。

### 2 研究組織

上記の設置目的を遂行するため、現在全体の組織を文化生成、文化連関、文化研究創成、文化構成、文化表象の五大部門に分け、それぞれ日本および西洋の思想、文化、社会、社会人類学、中国を中心とする東アジアの言語、思想、社会、宗教、科学、歴史地理、考古学などについての個別研究を行うとともに、それにもとづく学際的研究を進めている点に特徴がある。また附設の漢字情報研究センターでは、漢字情報に関する資料収集と公開、人文学国際センター（所内措置で附設）では、フランス国立極東学院およびイタリア国立東方学研究所と共同で、主に宗教学の分野における比較研究、現代中国研究センター（人間文化研究機構と共同で附設）では現代中国に関する人文科学・社会科学的な研究および関連資料の収集を目的として、活動を行っている。

### 3 共同研究

本研究所の研究最大の特徴は、共同研究の重視にあり、すでに戦前より日本で最も早く共同研究の手法を導入して多くの成果を生み出してきた。現在では各所員の個人研究を前提として、主に教授を班長とする20ほどの研究班を組織し、ほぼ3-5年の期間で、所内外の関連分野の専門家による学際的、分野横断的な研究を進めている。法人化後は、共同研究および成果報告の一層の充実を図るとともに、シンポジウムや一般向け講演会の開催などにも力を注いでいる。

### 4 フィールドワーク

研究上のもうひとつの特徴としてフィールドワークが挙げられる。かつて戦前・戦後にわたり、数多くの学術調査を行い、日本の海外学術調査をリードしてきた実績にもとづき、現在でも中国、南アジア、中央アジア、アメリカなどにおいて、現地の研究機関と協力しつつ調査活動を行っており、共同研究を通じて文献研究と結びつけた総合的で奥行き深い成果を挙げている。

### 5 社会還元

本研究所では、研究成果を広く社会に還元するため、従来、一般向けの平易な内容による夏季講座、より専門的内容を主とする開所記念講演を毎年開催してきたが、2006年度よりそれを拡充し、共同研究にもとづく連続講演会、演奏と講演を組み合わせたコンサートレクチャー、さらに京都市生涯学習総合センター、NHKなどとの共催による文化講座など多彩なプログラムを準備し、それらを「人文研アカデミー」の名のもと一括して統一的に運営している。また関連団体である財団法人・人文科学研究協会と共同で、在野の優秀な研究者を対象に人文科学協会賞を毎年授与、斯学の発展に寄与している。

### 6 21世紀COE

21世紀COE「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」では、東アジアの文字に関する人文情報学的研究および漢字文献ナレッジベースの構築を目的とする事業を進めている。

### 7 想定する関係者とその期待

本研究所で遂行している共同研究においては、国内外の人文科学研究者からは研究の集積と発信の共同利用拠点としての、また国外におけるフィールドワークにおいては、現地の研究機関から人材と資料の提供が期待されている。更に、そうした最前線の研究成果の公開に関しては、「人文研アカデミー友の会」会員はじめ市民からの期待が寄せられている。

## II 分析項目ごとの水準の判断

### 分析項目 I 研究活動の状況

#### (1) 観点ごとの分析

##### 観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況) 共同研究に関しては、毎年 24 から 25 の研究班を組織し、各班とも平均して 20 回近くの研究会を開催した。

個人研究については、積極的に科学研究費補助金および外部資金の獲得につとめ、活発な研究を行った。

社会貢献の分野では公開講座の多様化と拡充につとめた。また人文科学研究奨励賞（人文科学研究協会賞）を毎年贈呈し、在野研究者の人文科学研究振興につとめた。

##### 観点 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況) 附属漢字情報研究センターにおいては、1. 閲覧複写サービス、2. 所蔵資料及び文献類目のデータベース化と Web 上での公開、3. 漢籍に関する図書館担当職員講習会及び公開セミナーの開催、4. 漢籍目録データベース構築事業に関わる全国協議会の開催、共同研究班の設置、Web 上での成果公開、を行った。

#### (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 共同研究については、毎年参加者（特に学外からの参加者）が増加しており（別添表 1 参照）、本研究所が共同研究活動の拡大化と充実化をはかっていること、その結果関西地区の人文科学研究の拠点として活動していることが明らかである。

個人研究については、本研究所所員を代表者とする科学研究費補助金をのべ 150 件、その他の外部資金を 12 件獲得し、活発かつ旺盛な研究活動を推進している（別添表 2 参照）。

社会貢献としては、公開講座拡充のために「人文研アカデミー」を組織し、平成 18 年度 8 回、19 年度に 11 回の公開講演会を開催した

(<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/academy/2007/home.html> 参照)。加藤和人准教授主催による「ゲノム広場」を 16 年度から 19 年度まで全国 5 都市において開催した。さらに自治体等各種委員としてのべ 47 名が委嘱を受けた（別添表 3 参照）。

漢字情報研究センターでは図書サービス利用者が倍増（18 年度閲覧利用 22,305 冊、文献複写 1,791 件）した。また東京に会場を設けた一般向け公開セミナーを新規に開催した。漢籍目録データベース第二期プロジェクトを立ち上げた。以上の理由から期待される水準を上回ると判断した。

### 分析項目 II 研究成果の状況

#### (1) 観点ごとの分析

##### 観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況) 共同研究については、16 年度から 19 年度までの間に終了した共同研究班の成果が報告書の形で 8 点刊行された（業績説明書 1001～1009 参照）。また、研究成果を一般社会に向けて公表する試み（レクチャーコンサートや連続公開講座など <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/academy/2007/home.html> 参照）や、研究成果を毎年定期刊行物として公表する試み（『敦煌写本研究年報』

[http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/NIANBAO\\_1.pdf](http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/NIANBAO_1.pdf) 参照)が行われた。

個人研究について。研究所教員による業績は、単著 23 点、編著 (含共編) 30 点、論文 257 点にのぼった。また藤原辰史助教が日本ドイツ学会奨励賞 (平成 18 年 2 月) を、守岡知彦助教が日本情報処理学会山下記念賞 (平成 19 年 12 月) を、山室信一教授が (財) 司馬遼太郎記念財団司馬遼太郎賞 (平成 20 年 2 月) を、それぞれ受賞した。

社会貢献としては公開講座に基づく論文集二点 (業績説明書 1022, 1023 参照) を刊行し、また京都市生涯学習センター、京都大学総合博物館、NHK 文化センターなど、外部団体との共催による新たな情報発信方法を開拓した。17 年度より人文科学研究奨励賞 (19 年度より人文科学研究協会賞) を毎年一名の在野研究者に授与し、人文科学研究一般の研究振興に努めている (別添表 4、5 参照)。

漢字情報研究センターでは文部科学省の後援を受けて TOKYO 漢籍セミナーを立ち上げ、16 年度から 18 年度までで約 450 名の参加者を集めた。漢籍目録データベースには全国 37 機関の参加を得、約 70 万件のデータを集積した。さらに情報学研究所との共同研究に基づき、NACSIS-CAT との相互利用システムの試験的運用を開始した。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る

(判断理由) 共同研究、個人研究の成果として公開された業績は添付された業績説明書に見えるとおりに、書評等を通じていずれも極めて高い評価を得ており、各種の賞も授与されている。また専門的分野のみならず、最新の研究成果をわかりやすく社会に還元するための、新たな試みを多角的に行った。たとえば「ゲノム広場」イベントは 16 年度から 19 年度にかけて、6,300 人以上 (うち研究者 900 人、一般参加者 5,400 人) の参加者を集め、生命科学に関する幅広い情報発信の可能性を高いレベルで示した。

また、漢字情報研究センターでは全国規模の研究資源を整備するとともに、図書館担当者を対象とする講習会を開催して専門的職業知識の普及と向上につとめ、講習会用テキストとして『漢籍目録—カードのとりかた』(朋友書店, 2005 年) を出版した。

以上の理由により期待される水準を大きく上回ると判断した。

### Ⅲ 質の向上度の判断

#### ①事例1 「高度化・国際化した研究活動の推進」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組) 本研究所はかねてより国際的な学術交流を重視し、外国人研究者を客員研究員・招聘外国人学者として積極的に受け入れてきた。この伝統の上に立って、さらにその質・量を向上させるべく、様々なかたちで国際シンポジウムや国際共同研究を実施した。特に21世紀COEプログラムと関連して、国際会議やワークショップを国内外で数多く開催し、海外の東洋学研究者と学的交流を深めた。その主要なものとしては「中国宗教文献研究国際シンポジウム」(2004年11月18～21日、講師24名〔国内8名、海外16名〕)や、「漢字文化三千年」(2007年12月10～12日、講師20名〔国内15名、海外5名〕)が挙げられる。

この他にも、共同研究班における研究活動の一環として、あるいは競争的資金を獲得して、国際的な学術交流、意見交換を行う場を設けた。

また、新たに3つの機関(ライデン大学〔オランダ〕、東国大学〔韓国〕、国際哲学コレージュ〔フランス〕)と学術交流協定を締結し、継続的な学術交流の基盤を充実させた。

#### ②事例2 「漢字情報研究センターの全国共同利用機能の充実」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組) 漢籍目録データベース構築を目的とする事業を、東京大学東洋文化研究所、国立情報学研究所と連携して推進し、さらに平成18年度に第2期プロジェクトを立ち上げることによって、全国の主要な漢籍所蔵機関の参加を実現させ、Web上で公開している漢籍データは37機関、約70万件に及んだ。また同時にNACSIS-CATとの相互利用を可能にするシステム開発を目的として情報学研究所との共同研究を行い、その試行的な運用に漕ぎ着けた。それによって、全国規模での漢籍検索システムを世界に先駆けて開発し、中国学の世界的なハブセンターとしての機能を充実させることができた。

#### ③事例3 「共同研究の一層の推進」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組) 本研究所は、共同研究を重視し、活動の基盤に据えることで、内外に高く評価される多くの成果を生み出してきた。この伝統に立脚してさらに優れた成果を生み出すために、2007年度から、特に重点的に取り組む共同研究プロジェクトとして「基幹研究」を設定することとし、共同研究「第一次世界大戦の総合的研究に向けて」を発足させた。現代世界の原点としての第一次大戦をグローバルかつ総体的に把握するべく、56名の所内外の研究者が結集して、超領域的な研究を推進している。なお研究成果については、連続講演会「第一次世界大戦と芸術」を開催するなど、積極的に公開した。

#### ④事例4 「フィールドワークと文献研究との学的融合の促進」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組) 本研究所は、海外におけるフィールドワークを活発に行い、その成果を文献研究と結びつけることによって、より総合的な理解をなす学的伝統を育ててきた。そうした実績にたちながら、臨地研究と文献研究のさらに高次の融合を、共同研究において促進している。共同研究班「人種の表象と表現をめぐる融合研究」では、フィールドから得られる語り、動作、形、色、音などの資料と、テキストから得られる情報を合わせることにより、人種が構築される表象と表現について学際的な研究を進めている。

また、共同研究班「複数文化接触領域の人文科学」では、文化的なインターフェイスにおける地域横断的なフィールドワークの成果と多言語テキストのデータをつき合わせ、複数文化の界面における創造、軋轢、変容などの過程を明らかにしようと試みている。

#### ⑤事例5 「社会貢献のための取り組みー人文研アカデミーとゲノムひろば」(分析項目I)

(質の向上があったと判断する取組) 本研究所による社会貢献をよりいっそう推進する

ために、2006年度に、所内に「人文研アカデミー」を設立した。当アカデミーは、共同研究の最新成果をひろく世に問う「共同研究セミナー」、タイムリーな問題について討議する「特別シンポジウム」、中高校生向け講座「ジュニア・アカデミー」、講演と演奏を組み合わせた「レクチャーコンサート」、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）との共催による「アスニー・ゴールデンエイジ・アカデミー」、NHK文化センターとの共催による「特別講座」、そのほか、京都大学博物館、NHK文化センター、国際文化会館との共催プログラムや「夏季公開講座」「ヨーガ入門」など、多彩なプログラムを企画運営した。さらに、2007年度には、双方向性をもった社会連携の促進のために「人文研アカデミー友の会」を立ち上げ、会員数は220名を数えるにいたっている。

また、加藤和人准教授の主催する「ゲノムひろば」は、ゲノム研究者自身が研究の意義や成果を研究材料や実験機材などの実物付きポスターを使って市民に解説する催しで、研究者と市民との双方向コミュニケーションを目的に実施している。平成16年度～平成19年度では、東京、京都、大阪、福岡の4都市で計5回開催し、来場者延べ5,400人、研究者900人が参加した。

#### ⑥事例6 「人文科学分野における卓越した研究拠点の形成」（分析項目I）

（質の向上があったと判断する取組） 21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 漢字文化の全き継承と発展のために」を推進し、東アジアの文字に関する人文情報学的研究、漢字文献ナレッジベースの構築、およびそれらに関連する諸事業を実施した。その成果として「研究業績説明書」に挙げたような、卓越した水準の業績が得られている。

また人文学の国際連携拠点として、2006年4月に「人文学国際センター」を設置した。現在のところ、フランス国立極東学院とイタリア国立東方学研究所との連携に基づき、シンポジウムの開催や、基幹プロジェクトの実施を進めている。これまでに6回の国際シンポジウム・講演会をおこない、基幹プロジェクトとしては、人文科学研究所の共同研究班「複数文化接触領域の人文学」を2007年度から発足させた。同時にこれまでの成果を収めた機関誌、『コンタクト・ゾーン』を創刊した。

加えて、現代中国についての研究を重点的に推進し、持続的な共同研究を行うための拠点として、現代中国研究センターを2007年4月に設置した。このセンターは、人間文化研究機構（大学共同利用機関法人）と京都大学が共同設置する現代中国研究の拠点であり、全国6拠点（早稲田大学など）の一つとして、学内の関連諸部局や他拠点とも連携し、ネットワーク型の共同研究を実施している。2つの研究グループ（「現代中国文化の深層構造」と「現代中国政治の社会基盤」）に別れ、定期的に共同研究会を開くと同時に、これまでに設立記念公開講演会を含む3回の公開講演会・討論会を開催した。